

Title	加藤栄一・北島万次・深谷克己編著, 『幕藩制国家と異域・異国』
Sub Title	Eiichi Kato, Bakuhan-sei kokka to iiki ikoku, Tokyo, 1989
Author	小山, 幸伸(Koyama, Yukinobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.4 (1991. 7) ,p.190(594)- 197(601)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0190">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0190</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

加藤栄一・北島万次・深谷克己編著

『幕藩制国家と異域・異国』

小山 幸 伸

一

本書は、幕藩制国家の有した対外関係の枠組みとして「四つの口」、すなわち松前口・対馬口・薩摩口・長崎口を同列に取り上げ、それぞれの口の形成過程を中心に、幕藩制国家の性格を説明しようとしたものである。

その構成は以下の通りである。

総論 幕藩制国家と異域・異国（深谷克己）

I 松前口と蝦夷地

和人地権力の形成（海保領夫）

近世後期の幕藩権力とアイヌ（菊池勇夫）

II 対馬口と朝鮮王国

十六世紀の朝鮮・対馬・東アジア水域（高橋公明）

豊臣政権の朝鮮侵略と五山僧（北島万次）

III 薩摩口と琉球王国

琉球王国の形成（高良倉吉）

対明政策と琉球支配（紙屋敦之）

IV 長崎口と異国

『公義』とオランダ（加藤栄一）

東アジアと鎖国日本（中村質）

長崎口の形成（荒野泰典）

ここで単に「対外関係」とせず、「異域・異国」としているのは、四つの口における交渉相手の性格の違いから来るものである。「異域」とは蝦夷地・琉球を指し、いずれも幕藩制社会の論理に組込まれており、菊池論文に示されたごとく「内国化」する要素を持っていた。これに対し「異国」とは対馬口を通じての朝鮮国と、長崎口を通じての中国人・オランダ人との交渉をさしている。

また、深谷氏の総論に示されていることではあるが、本書の編集に際しては、①異域・異国の側の社会あるいは権力の検討②日本の中央の国家意志③「口」になっている地域の権力や社会のあり方、以上三つのレベルから考察することを目標としていた。これらの課題や「口」の形成過程という目標は必ずしも満たされていないが、幕藩制国家の持つ「国家」としての性格を知る上で、貴重な示唆を与えてくれるものである。

二

深谷氏による総論は、本書の編集方針と所収各論の主旨を記し、十六世紀の世界変動と日本の位置づけを概観した上で、幕藩体制の内部編成と「異域・異国」との問題点を述べている。

同氏は「貿易が近世の経済を動かしたというより、国際通商の断念が、二次的に経済構造に大きな影響を与えた。言いかえると、近世の海禁環境は一攫千金の貿易にかわる財政基盤の確保に向かうことを強いた」として、「鎖国」の意味を説いている。また「もし朱印船貿易体制が発展的にすすめば、（中略）

地域間の経済格差もはなはだしく大きいものになったであろう」と述べている。このような記述は、「鎖国」を「海禁」としてはいるが、従来の「鎖国」概念を変えるものではないと思われる。

同氏は「海禁体制は南欧・西欧の軍事的脅威にさらされたため選択ではなく、内国的な国家意識形成にかかわる問題であった」とされるが、国家意識というものが内国的問題のみに起因し、それで完結するものではないと思うのである。近年取り上げられている国家威信にかかわる問題としての「軍事的脅威」論の方が、むしろ説得的なのではないだろうか。もっとも評者は実際に「軍事的脅威」が存在していたとは思えず、あくまで「公儀」の威信にかかわる問題という意味においてのみ、これを評価するものである。そのような点からも、「公儀」の国際関係への対応という問題を考えるべきであろう。その意味では、加藤論文が序において述べているとおり、「公儀」による「対外関係の新たな定置」とはいかなるものであったか、という課題の達成を目指すべきである。

### 三

本書の各論文についての主旨は、総論に詳しく紹介されているので、ここでは簡単に紹介するにとどめ、評者の感想や疑問をいささか述べてみたい。

#### I—① 海保論文

中世蝦夷地が近世蝦夷地へと如何に転換したのかを、「渡党」

を中心とした和人の形成から検討している。中世蝦夷地には「渡党」と「日ノ本・唐子」の三種類の蝦夷が存在し、「日ノ本・唐子」は北海道本島の東西のアイヌであることは間違いない。しかし「渡党」は必ずしも意見の一致をみてはいない。海保氏は「渡党」とは鎌倉幕府により流刑された西国からの悪党が土着化（蝦夷化）し、流通の担い手としてさらに悪党的成長を遂げたものであると規定された。この海保論は、近年の考古学的成果から、渡来銭や中国製陶磁器が集中していた事実などが確認されたことにより、説得的なものとなっている。

この「渡党」は十五世紀中期の戦乱の中で「館主」へと成長し、その統一者蠣崎氏が、東西の「夷大将」と領域分割の協定を結んだ結果、近世蝦夷地の原型が形成された。この蠣崎氏が幕藩制国家の一員として承認され、松前藩を成立させることにより、和人和と「蝦夷地」の体制的区分がなされ、かくして蠣崎氏は中世の蝦夷地権力から近世の和人和権力へと転換したのである。

海保論の骨格をなす「渡党」の流通の担い手としての悪党的成長論は、先にも述べたように十分説得的であり、今後定説化するものと思われる。ただ、渡来銭や中国製陶磁器の渡島半島南部・津軽（＝中世蝦夷地）への過度の集中の問題に関し、他地域との比較研究も期待したい。

また、氏の指摘によると「松前藩は時代が進むにつれ、渡党蝦夷出身であることをかくすようになった」のであるが、このことは中世的性格が時間の経緯とともに消滅したか、あるいは

和人権力としてのアピールだとも考えられるだろう。しかし逆に、近世初期の段階、つまり統一政権による「幕藩制国家」形成期に、あえて「狄の長」たることを明確にする必然性があったと考えられるのではないだろうか。つまり中央の国家意識との関係から、和人地権力形成期を検討する余地はないであろうか。

## II-② 菊池論文

近世後期以降の幕府直轄領化の中で、アイヌ社会に対して「介抱」の論理により、幕府はアイヌ社会への支配を貫徹し、蝦夷地の内国化を行なった。菊池論文はその過程を、「被下物」の実態を詳細に検討することにより説明しようとしたものである。幕府は「介抱」の言葉が示す通り、アイヌに対して救済者・保護者としての立場から、種々の機会に「被下物」を与え服従させているのである。特にエトロフ場所の事例を紹介し、本島の場所には見られない程の「被下物」の回数があったことを示し、それ故にエトロフ場所においては、本島以上に内国化したことを示した。エトロフ場所では「介抱」が行なわれた背景には、ロシアの対日接近による北方に対する危機意識があったのである。

菊池論文は、第一次幕領時代から「介抱」の論理が一貫して採用されていたことを実証した労作である。菊池氏が指摘したように、「介抱」はアイヌ社会の自立を害する落し穴であり、「被下物」の中心が習慣性をともなう酒と煙草であったことは注意を要するだろう。この「被下物」がアイヌ社会にどのような

な影響を与えたのか、アイヌ社会内部での流通を含め、アイヌ社会の社会構造の解明が課題として残されたのではないだろうか。

## II-① 高橋論文

朝鮮と東アジア海域の関係は、十五世紀には対馬を媒介とする通交体制であったが、十六世紀には変動を来した。明の海商の積極的な海外進出と九州各地の海上勢力との結合を背景に、朝鮮側は日本人との通交関係の縮小を意図した。そして三浦の乱により恒居倭を一掃し、対馬との通交を断絶することにより、朝鮮政府は倭人の「公儀」たることを自ら否定したのである。この「公儀」の否定は、朝鮮王室内部における官僚勢力の対立をともなっていた。朝鮮の華夷意識の衰退の中で、対馬は倭寇情報の提供者としての立場から朝鮮との関係を継続し、情報提供の反対給付として貿易権を獲得した。対馬はこの過程の中で、排他的に貿易権を集中掌握したのである。

高橋氏によれば、朝鮮が対馬の「公儀」であったが、華夷意識の衰退の中で「公儀」たることを自ら否定したとのことである。従来からの同氏の見解を発展させたものであるが、「公儀」の定義を改めて明確にする必要はないだろうか。特に三浦の乱が現地責任者の悪政を朝鮮中央政府に訴えたからといって、日本の近世における百姓一揆と同列に論じることが出来るだろうか。訴えの背景に朝鮮政府を「公儀」とする意識があったか否かを論じる以上、この点は是非とも明確にしておかねばならないだろう。

## II-② 北島論文

五山僧が漢籍の知識から中世・近世において外交の担い手であったことはよく知られているが、禅僧らがいかに豊臣政権の朝鮮侵略に関与していたかを分析したものである。相国寺領の太閤検地を通し、西笑承兌らの五山僧が豊臣政権への奉仕者となり、対外侵略戦争の中で軍事上の折衝や朝鮮人民への榜文の作成などを中心に、政権の一翼を担っていたのである。そのような意味から、五山僧は封建国家の成員であったことを明確にした。

北島論文により、五山僧や諸国の禅僧の役割が明確となり、彼らの行動がどのようなものであったか詳らかになった。また、五山僧の豊臣政権への接近が、相国寺領に対する太閤検地をめぐる交渉から開始し、この過程で相国寺が特権的立場を許されたことなどを経て、豊臣政権に奉仕する姿勢をとるようになったという論述は、十分説得的であった。

中世以来行なわれている禅僧による外交が、中国側にはどう受け止められていたのであろうか。また戦国期以降の五山の財政構造はどうであったのか、などの事柄も知りたいところである。

## III-① 高良論文

薩摩による琉球侵略が行なわれる以前の「古琉球」の尚真期は、琉球王国の基盤が確立された時期である。同時期には、仏教奨励・軍備強化・中国貿易の発展が見られる他、各地に割拠していた按司を首里に集住させ、職制・位階制を整備した。ま

た地方行政制度としては、「間切・シマ制度」を確立している。このような王権の絶対化には、固有の信仰がイデオロギー的基礎となっている。

高良論文は、「異域」である琉球の権力構造の分析をめぐしたものである。「古琉球」における尚真期が持った意義は、本論により明確になったと思う。ただ、尚真期については冊封問題を中心に中国との関係について、述べられてはいるが、より広い視野からの分析も可能なのではないだろうか。中国皇帝と琉球王との関係からでは見えてこないことでも、当時の琉球が東アジアにおいて占めた位置を再検討することにより、中国と琉球国との関係が見直されることもあるのではないだろうか。貿易構造の分析などを通じて、東アジア水域における琉球国の位置付けと、それが近世へ移行する過程でどのように変化するかなどの課題もあつたらう。

## III-② 紙屋論文

独立国家であった琉球国は、豊臣政権により島津氏の「与力」として知行・軍役体系に組み込まれた。島津氏の琉球侵略以後、日本への同化政策が取られたが、琉明関係正常化の中で「異国」として確立し、明清交代後の日琉関係は隠蔽化されたのである。

紙屋論文は、日明関係正常化のチャンネルとしての琉球が、その後の幕府の政策転換の中で、琉球の支配が如何に変遷したかを分析したものである。

中国との外交チャンネルとして琉球を幕府が重視したことは

同感であるが、長崎との関係についてはいささか疑問が残る。本書二七三頁における「第一次鎖国令では中国船の来航は実現しなかった。(中略)第三次鎖国令を出し、日本船の海外渡航を全面的に禁止すると同時に、中国船の来航が確立した。」という記述は事実と異なるのではないだろうか。唐船の長崎来航が、琉明関係正常化を前提としたと考えているようだが、唐船と長崎の関係はそれ自体議論されるべき問題であろう。勿論、評者として、唐船の長崎渡米が当時の東アジア情勢と無関係であったとは考えてはいないが、短絡的な結び付けにならぬよう慎重を期す必要のある課題である。

また紙屋氏は女真族脅威論を展開されているが、この点についても、典拠とした史料の記載が風聞等を含むという問題はな

#### IV-① 加藤論文

まず、オランダ東インド会社の成立を説明し、同会社による東洋進出が、スペイン勢力の通商網分断の目的を持つオランダ独立戦争の一貫であったことを論証した。その点から「初期航海」の意義を明確にし、対日接近の背景を説明している。また、日本の平戸商館が持った意義についても、設立当初の「軍事拠点」としての意義から、台湾事件を契機に「商人」としての貿易拠点に変化したことを論証している。

このようなオランダ側の対日接近の背景と、日本貿易の構造的変化について、日本側が「公儀」として如何に対応したか、という点についても詳細に検討が加えられている。

加藤論文は、これまでの加藤氏の重厚なる研究蓄積による成果を、端的にまとめたものであると言えるだろう。特に平戸商館の貿易構造の変化に関する研究は、氏がこれまで進めてきた会計帳簿の分析の成果であり、初期の「軍事拠点」としての商館の存在を歴史的背景から考察された前半の記述は、同氏の「軍事拠点」論に厚みを加えるものである。

加藤論文により、オランダが「歴代の御被官」として位置付けられた背景が論証されたのであるが、評者としてはその位置付け方について今後さらに論議を重ねるべきではないかと考えている。例えば、オランダ商館長によって、ほぼ毎年江戸参府などの「臣下の礼」が取られていることはよく知られているが、この点について内外の史料よりさらに研究が深化されねばならないと考える。つまり、朝鮮通信使とは明らかに意味の違う商館長の江戸参府では、外国使節としてよりも、むしろ大名の参勤交代と同列の規定で行なわれていたのではないか。そのような点が実証されれば、これが幕藩体制にどのように組み込まれたのか、という点を明確にすることも可能となるだろう。幕藩制国家の枠組みに組み込まれたオランダが、「華夷秩序」の内に位置付けられたということに対して何ら異論はないが、その構造が捉えられただけで事足りりとする学界の一部の動向には、同調できないものを感じる。

#### IV-② 中村論文

長崎における「唐方」との関係を、長崎貿易の制度的変遷を中心にまとめたものである。

まず「鎖国の形成」として、秀吉の対明観を取り上げ、主従立場をかえた「勘合」の復活の発想などは、一元的な日本を中心とする中華的国際関係を構想したと捉えられる。また家康の外交政策については、対外的な承認を得ることにより、前政権や諸大名との差を明確にしたと位置付けている。このような近世初期の対外関係の帰結としての「鎖国」の中で、長崎唐人社会が変則的に維持された点についても論及している。

次に「鎖国」下における貿易体制を「鎖国貿易体制」として捉え、その特質を貿易制度の変遷に視点を据えて論述されている。特に正徳新例を、鎖国貿易体制の完成点として捉えている点は正に卓見である。またこの鎖国貿易体制が崩壊するのは、外圧によるばかりではなく、国内市場をめぐる諸問題が錯綜する中で貿易・流通の体制が崩壊したことも、その原因として無視できないとの指摘もなされている。

中村論文は、従来中村氏が進めてきた実証的な研究蓄積を踏まえた概説風の論考であるが、正徳新例をして「鎖国貿易体制」の完成とみなす同氏の鎖国貿易体制論は、実証的であり、十分に説得的である。つまり近世の長崎における貿易というような小さな問題としてではなく、国内の流通や長崎貿易をめぐる幕府と藩勢力との対抗関係まで視野に入れた意味で、「鎖国貿易体制」と述べていることが、本稿によってより明確になったことと思う。

しかし、本書の編集方針が、「口の形成過程」における「口の地域権力構造ならびに交渉相手側の権力構造や社会について

論述することであるならば、氏に与えられた課題は長崎貿易全般にわたる概説ではなかったのではないかと感ずるのである。例えば、秀吉の狙った「勘合」が、日本を中心とする国家管理の通交体制であるとするならば、相手側の社会に関する考察として、広く東南アジア地域における華僑勢力の問題等触れるべき事柄は多々あったと思われる。勿論それが如何に至難なことであるか評者としてわからぬではないが、全般的な展望を示していただけならありがたかった。

#### IV—③ 荒野論文

貿易都市長崎が、統一政権による「平和」領域形成や「自由」制限の諸政策、あるいは非キリスト教化という過程を通して、「長崎口」へと変質する。こうしてできた「長崎口」は境界としては、「海禁」制下唯一の開港地であり、異国人も従う「平和」の領域であり、異国人との接触による「悪臭」の場であった。

荒野論文は、「長崎口」の社会のもつ境界性に着眼し、社会的的手法によって本書編集の課題に答えようとしたものである。従来知られていた長崎に対する諸政策を、「平和」・「自由」というキーワードを用いて「平和」領域の形成や「自由」制限という概念で捉え直した点は、評価されてしかるべきであると思う。

しかし、その論の展開にはいささか論議の余地もなきにしもあらずである。特に京都人の旅行者による随筆記事に基づく「臭い」に関する論述箇所は、歴史学的方法論としても問題は

ないであろうか。そもそも『長崎土産』そのものの史料的価値は一体どの程度評価出来るものであろうか。当時の「境界」に対する認識へのアプローチとしては興味深いが、ここから拡大して解釈するには慎重な議論が必要であろう。

次に貿易都市長崎について触れている箇所であるが、本書三八九―三九〇頁において、長崎の人口増の原因として、貿易船の長崎集中があると述べておられる中に、イギリスが入っているのは、事実誤認であろう。註に挙げられた中村質氏の論文にもそのような記述は見られない。

最後に長崎口の形成について述べた箇所についても、論の展開上いささか疑問が残った。氏は、従来異国人に保障されていた「自由」が制限され、また日本人に対する「自由」も制限される中で彼らの「合意」を取り付け、そのことによって「平和」領域である長崎口が形成したとされるのであるが、「合意」が本当に行なわれたのであろうか。実証が必要な問題がいろいろありはしないだろうか。例えば、貿易制度の問題点として、同氏は徳川政権の選択として、朱印船貿易を切り捨て、新興都市富裕層の成長に則して糸割符商人を選択した背景に、成長しつつあった都市住民たちの「合意」があったとしている。この点についても、幕府権力による新興都市富裕層の掌握という点と——それ自体は中田易直氏の見解であるが——は理解できるが、そこに「合意」を見ることが出来るだろうか。「合意」の上に政策が実現されたというのであれば、糸割符制度の理解とも係わり、是非とも詳述してもらいたいところである。

さらに、キリスト教禁教令に關しても、民衆の「合意」のもとに、長崎の非キリスト教改宗事業が進められたとされるのであるが、この点に關しても論の展開として問題はないだろうか。

荒野氏の「平和」領域の形成と「自由」の制限という捉え方には興味深いものがあるが、「合意」という点に關してはなお実証的検討を重ねる必要があるだろう。評者には同氏の「合意」という概念が捉えきれないのかもしれないが、政策の実現の前提として述べるながら、政策の実現の結果から遡って解釈されているに過ぎないと思われるのである。

#### 四

最後に、本書を構成する「四つの口」論とでも言うべきものに対して述べておきたい。

本書において示された対外關係に対する分析視角は、大きく分けて二点ある。まず対外關係を幕藩制国家の構造として捉えている点が挙げられる。もう一点は、従来の西洋と日本との接触に、東アジアという要因を組み入れた点が挙げられる。このような分析視角に立つ時、長崎におけるヨーロッパ人と日本人との交渉のみをもって対外關係として認識していた歴史観を、完全に止揚するのである。またそこから、「鎖国」という概念に対しても当然のごとく疑問が投げかけられるのである。本書はそのような意味において、今日の対外關係史研究の到達点を示すものである。



しかし、なお疑問がないわけではない。「四つの口」として、従来軽視あるいは無視されることすらあった外交場面を、真正面から捉えようとする態度は高く評価されるべきであるが、評者は同一平面上に四つの口を並べて論じる事になお抵抗を感じるのである。つまり、「長崎口」というものを、他とは性格の異なるものとして見るべきなのではないかと考えるのである。

長崎の特異性としては二点挙げられるだろう。第一に構造的な相違がある。これには政治的な意味と市場構造・流通構造上の意味から相違があげられる。長崎のみが直轄都市であり、政治上の支配体制が異なるということである。また流通上で言えば、前者の要因とかわかることであるが、他の三つの口が長崎に収斂される構造をもつものとして捉えられる点がある。この傾向は時代が降るほど顕著な傾向を示している。松前の俵物の長崎集中や、薩摩藩による「唐物」の長崎販売などが、その好個の例である。このような構造的相違から、「四つの口」は近世日本の窓口として開いていたが、それは長崎を頂点とする三角錐のごとき立体的な構造であったと考えられる。平面上の四点として捉える傾向に対して、評者は不満と不足を感じるのである。

第二に同一平面上に並べたとしても、長崎と他の三カ所とは、そのベクトルの相違が挙げられる。他の三カ所はいずれも松前藩なり対馬藩なり薩摩藩なりが、異域・異国という「外」に向かつて交渉を持っているのに対し、長崎は「外」から入ってくるものを受け入れるのである。つまり「外」から「内」へ

というベクトルを持つのは長崎だけなのである。そのような意味からも長崎の特異性を指摘できるのではないだろうか。

「長崎口」というものをベクトルの方向の相違から捉える時、「長崎口」の形成は単に貿易都市長崎だけの問題ではなくなるだろう。つまり近世初頭よりの様々な寄港地の機能を長崎が吸収していく過程で、「長崎口」なるものが形成されると考えるのである。そのような意味から言えば、加藤氏が「長崎口」の形成としてオランダ商館を長崎移転以前の平戸から取り上げているが、それ以外の寄港地の機能を吸収する過程も取り上げられるべきであったと感ずる。勿論、紙屋氏や荒野氏の論の中にも、そのような視点が見られるが、実証的な研究としては尚今後に残された面もあるように思われる。例えば、長崎への貿易船の集中の問題点として、元和二年の二港制限令と唐船の集中の問題点がある。前者に関して言えば、同令が薩摩・土佐・紀伊など「黒船・いきりす船」の着岸の可能性の高い地域に伝達されている。また唐船に関して、薩摩など九州各地に寄港していたことはよく知られている。そのような広い地域における「外から内へのベクトル」を長崎一点に集約させた過程を考慮し、長崎の形成を考察する必要があるのではないだろうか。

以上、対外関係史研究の一つの頂点である本書に対して、浅学なる評者の無知・無理解から不適切な論評も多いかと思われるが、ご寛容をお願いしたい。

(校倉書房、一九八九年十月、四五二頁 定価三九一四円)